



平成30年度 全国学力・学習状況調査の結果の報告と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語, 数学, 理科)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

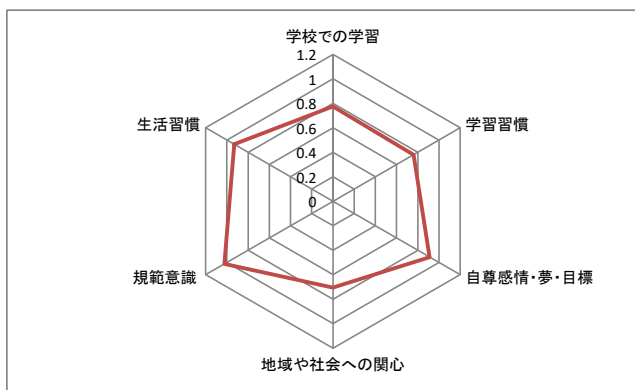
学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 教科に関する調査結果の概要

教科・区分	学力調査の分析(傾向や特徴)	全国平均正答率との比較
国語A	・聞く・話す能力や書く能力は全国平均正答率よりやや下がっていたが、読む能力に関しては全国平均を上回っていた。 ・全体的に無回答率が低く、国語の学習に対する興味・関心が高いと考えられる。	下回っている
国語B	・書く能力、読む能力を問う問題では、記述式の問題でも全国平均を上回り、力が伸びてきていることがわかる。 ・話す・聞く能力に関しては、質問の意図を考えたり、話の展開を注意して聞き、必要に応じて質問する力がついていないことが課題である。	下回っている
数学A	・全国平均正答率を下回り、特に数と式の領域では無回答率も高く、課題が見られた。 ・資料の活用や図形に関する問題は、平均正答率も全国平均正答率よりやや下回り、無回答率も低かった。	下回っている
数学B	・図形の証明に関する問題の平均正答率が低く、無回答率も高かったが、数と式の問題で、数学的な表現を用いて説明することができる生徒の割合が全国平均との差があまりなかった。 ・理由を数学的に説明する問題の無回答率が高かったが、選択式の問題での無回答率は0であった。	下回っている
理科	・全国平均を下回り、特に記述式の問題に課題が見られた。 ・物理領域の問題を得意としているが、自然現象への興味・関心が低いので、生物領域を苦手とする傾向が強かった。 ・食塩水の濃度について考える問題やモデル実験の知識・技能を活用する問題では、正答率が全国平均を上回っていた。	下回っている

2. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析

- ・家で宿題をしている生徒の割合(89.1%)で、全国平均には若干及ばなかったが、2年時より2割近く伸びていた。
- ・授業では課題の解決に向けて自ら考え、自ら取り組んでいると答えた生徒の割合(52%)は昨年度より、やや下がっていた。
- ・生徒の話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると答えた生徒の割合(64.4%)と、2年時より1割伸びていた。
- ・家で自分で計画を立てて勉強をしていると答えた生徒の割合(34.2%)で全国平均より低かった。
- ・自分にはよい所があると思うと答えた生徒の割合(67.1%)は、2年時よりも1割以上高くなっていた。

3. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

- ・継続して漢字コンクールや英単語コンクールに学校全体にて取り組むことにより、基礎学力の向上を図り、やればできるという達成感を感じさせることによって、生徒の学習に対する意欲を高める。本年度から、計算コンクールも実施し、数学に対する意欲の向上も図る。
- ・定期考査前に「トライアルタイム」という習熟度学習に全職員で取り組むことで、数学につまずいた生徒のために、個別指導を実施し、わかる喜びを味わわせ、定期考査への取り組み意欲につなげる。
- ・定期テストに『チャレンジタイム』を実施し、対策問題『でるもん』を作成し、取り組ませることによって、生徒の考査への取り組み意欲を高める。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- ・家庭学習の定着のために、生徒の意見を取り入れた「企救ノート」を作成し、家庭学習に取り組ませる。何を勉強したらよいか分からない生徒については、学年ごとにプリントを用意し、毎日提出することを目標にして、家庭学習の定着を図る。
- ・週末課題や長期休暇を活用し、基礎学習の定着を図る。
- ・学校便りやホームページを活用して保護者に学校の取り組みを知らせることによって、家庭学習への定着が図れるようにする。